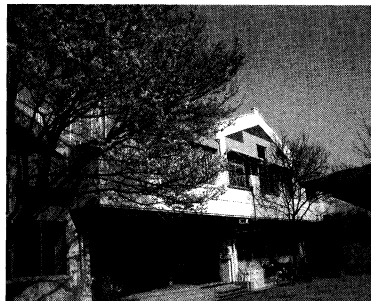


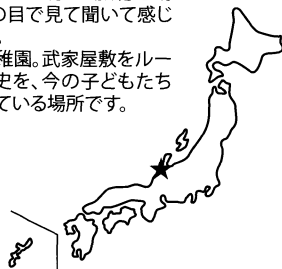
学校法人 木の花幼稚園

石川県金沢市



日本全国にある「子どもが育つ場所」を幼稚園教員が訪問。自分の目で見て聞いて感じたことをレポートします。

第3回目は木の花幼稚園。武家屋敷をルーツにもつ園としての歴史を、今の子どもたちの生活に確実につなげている場所です。



金沢の長町武家屋敷地区と呼ばれる場所にある木の花幼稚園を訪問した日は、朝から冷たい雨が降っていた。約束の時間に間に合うように、雨の中、私たちは宿泊先のホテルから早足で幼稚園に向かった。番地を頼りに「この辺り？」と探すが、周りは静かなたたずまいの住宅地。本当にこんな所に幼稚園があるのかしらと思っていると、町並みにすっかり溶け込んだ「木の花幼稚園」の門構えを発見。一般家庭ぐらゐの間口の門から奥を見ると、園舎の瓦屋根が目飛び込んできた。門の横には「木の花幼稚園の由来」が以下のように刻まれていた。

「明治三八年（一九〇五）元加賀藩の家老 長男爵の母堂長寛子が幼児教育の重要性を説き、官民各界の賛同をえて自ら園長となり幼稚園を創立した。園舎は藩主前田家より寄附された武家屋敷が当てられ、当家御紋所剣梅鉢にちなんで（このはなようちえん）と名づけられた」

由来にあるように、武家屋敷に手を加え園舎として始まった「木の花幼稚園」。平成二年に現園舎を

新築するにあたって、この園のルートが武家屋敷であったことと、近隣の町並みとの調和を意識して、瓦屋根にしたということである。瓦屋根からやや古めかしい印象をもつて園舎の中に足を踏み入れると、中はとても近代的で明るい。冷たい雨にぬれて来たこともあり、何だか別世界に入り込んだような印象をもつた。

◆「ちよこつとのお部屋」

玄関を入ってすぐの所はオープンスペースになっていて、高さの低い菱形の机と三角形の椅子が中ほどに置かれていた。周りは本棚で囲まれていて、「ちよこつとのお部屋」と呼ばれているということだ。

私たちが、木の花幼稚園を後にする時には、「おのこり」（預かり保育のこと）の子どもたちが、この場所で先生に本を読んでもらっていた。先生が三角の椅子に座り、



子どもたちは菱形の机の上に思い思いに座って読んでもらっていたが、何とも温かい雰囲気とその周りを包んでいた。

この場所だけではなく、木の花幼稚園には、子どもたちがちよこつと座れる場所、安心して居られる場所がいろいろな所にあった。「ちよこつと」という命名に、子どもが生活する場を考える上で、木の花幼稚園が大事にできていることを感じ取ることができる。

◆動きを引き出す環境のあれこれ

「ちよこつとのお部屋」の先には、大きなホールが広がっていた。ホールの天井は吹き抜けになっていて、二階の渡り廊下からホール全体が見下ろせる。ホールの左手は、宝塚の舞台の大階段を思い起こさせるような大きな階段が二階へと続いている。



階段の一部は、滑り台になって
いる。階段の手すりも太く、子
どもたちであれば滑り降りるこ
ともできる。

子どもたちが思わず上りた
くなる、動きたくなる、座りた
くなる、潜り込みたくなる段差、
傾斜、空間が園舎の中に絶妙に

ちりばめられている。この園舎を新築する時に、「遊
びを引き出し、支えるのはまず〈空間〉。遊び心をく
すぐる、考える前に身体が動きだすように空間を用
意する。子どももそうだが大人でも〈遊び〉たくな
る、そんな空間構成が重要」と考え、作られている
からである。

階段の横には、一階の保育室との境の窓があり、
子どもたちは大階段からその窓辺に座って保育室の
中の様子を見たり、わざわざその窓を経由して保育
室に入ったりしていた。

「○ちゃんの隣がよかつたんだけど……」。集まりの



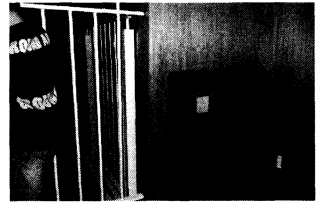
場面で思いどおりにできなかった
男児がいったん保育室を出て大階
段の窓からみんなの様子を見てい
た。少し距離を置いて保育室の様
子を見るのに、階段から保育室に
開かれた窓は格好の空間である。
ガラスで隔てられながら、でもつ
ながっている。子どもたちは自分
のタイミングで、そこからまた自分の場所に戻って
いけるのである。

◆俯瞰することができる場所

二階に上がると、ホール全体が見渡せるようにな
っている。子どもたちにとって、高い所から見渡す
体験というのは、とても大事な体験だと思う。背丈
が小さい子どもたちの視線は、どうしても地面や床
の近辺に留まりがちである。園舎内も、園庭も、下
の様子を俯瞰ふかんできる場所がこの園にはいろいろ用意
されている。園舎内であれば、渡り廊下、キャット



ウォークなどから、下を見下ろす子どもたちの姿があった。キャットウォークとは、子どもでもしゃがまないと通れないような扉をくぐって入る、ホールの上にある通路で、渡り廊下から見て両サイドにある。



▲キャットウォークの入り口

私たちが保育参観を始めてから少しすると、年中組の2クラスのうち1クラスはホールで、もう1ク

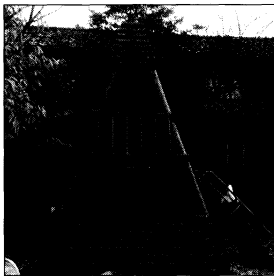
ラスは二階の保育室で、発表会に向けての活動をしている。二階の保育室で活動している子どもが渡り廊下からホールの様子を見て、ふらつと下に降りていった。

木の花幼稚園では、自由に遊んでいるばかりでなく、クラスで集まりをする時間もあるし、「お仕事だよ」と子ども

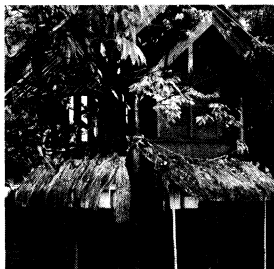


に課せられる活動もある。私たちが参観に伺った日も、かなり長いことクラスでの取り組みをしていた。その間も、ホールの様子を上から見たり、前述した窓から出入りする子どもの姿が見られた。その姿から、子どもが自分から動きだすこと、参加することが大前提に日々の生活が進められていることが伝わってきた。

岩^ちや、現在の園長先生である鮎川先生とお父さんたちで増築中のツリーハウスなど、園庭にも下を見下ろせる場所がいろいろ作られていた。雨が小降りになると子どもたちはすぐに園庭に出て、ツリーハウスに登ろうとしていた。一段が子どもたちにとつ



▲岩



▲ツリーハウス

ては大きい縄ばしごを何段も登らないと上の階には登れない。誰でも登れるものではなく、登れるようになることにあこがれて、挑戦を重ねていく。登れた時のうれしさは格別だろうし、やつとの思いで登った所では、子どもたちも無茶をしないのだろう。

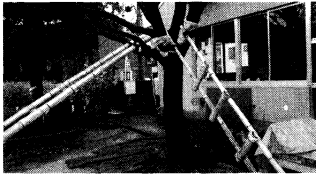
◆回遊できる道

もう一つ目に留まったのは、これもお父さんたちの手作りの、園庭の隅に作られた木の道である。まだ製作途中だということだが、雨が上ると、ぬるつとした木に

足元を取られない

ように気を付けながら行ったり来たりしている子どもたちの姿があった。

園庭の木に何気なく掛けられた竹のはしごがあったり、子どもが自分で挑戦して、いつのまにか遊べる身体になっていくことができる仕掛け



が至る所に作られていた。

◆内と外をつなげる空間

ホールの床は大部分がフロアリングであるが、園庭へとつながるガラス戸の周辺はタイル敷きになっている。その場所で、おもちゃつきに備えて保護者の有志が臼の準備をしていた。また、預かり保育の時間帯になると、洗濯物が干され、子どもたちが干す作業をこく自然に手伝っていた。まさに内と外をつなぐ生活がこの場所で展開されていた。子どもたちの生活は、外遊びと室内遊びというように分けられるものではなく、内でもあり外でもあるようなフアジーな空間が子どもたちの生活をつなげていくのだろう。

◆歴史を大事に現在へとつなげる

木の花幼稚園のことを語るのに忘れてはならないのが、歴史を今に生かしていることである。朝最初



